

ハマル語の受動表現・使役表現に関する覚え書き*

高橋 洋成

(筑波大学)

takahashi.yona.gp@u.tsukuba.ac.jp

1 はじめに

本稿で記述するハマル語は、エチオピア南西部の低地オモ溪谷で使用されているオモ系言語の1つである。ハマル語の中心的話者であるハマル族の人々は、南部諸民族州 (Southern Nations, Nationalities and People's Region) における南オモ県の県都ジンカから南に約 60km に位置するディメカ、および約 130km に位置するトゥルミを中心に生活している。筆者は 2006 年からほぼ毎年ハマル語の現地調査を行い、言語データの収集を行っている¹。

本稿はハマル語における自動詞と他動詞、および受動表現と使役表現について、語形や構文を分類・整理することを目指す。また、それらに関連する表現についても触れる。

2 ハマル語文法の概観

2.1 音素目録

本稿では、ハマル語に次の音素を立てる。

p, b, β, m, t, d, d̪, n, k, g, ɡ, ŋ, ʔ; s, z, š[f], č [tʃ], ʃ [dʒ], h [ɦ]; t', č' [tʃ'], q'; r, l, w, j; i, e, a, o, u; i:, e:, a:, o:, u:

ハマル語に特徴的な音は入破音 /β, d̪, ɡ/ と放出音 /t', č', q'/ である。調音上無気である入破音に対し、/p, t, k/ は強い有気音であり、ほぼ自由に摩擦音と交替する²。また、/h/ は有聲の [ɦ] であるが、本稿では読みやすさのためにこちらの記号を当てる。

*本調査は平成 22~25 年度科学研究費基盤研究 (B) 「変容するエチオピア諸言語の静態と動態に関する総合的研究、ならびにデータベース構築」代表：柘植洋一 (金沢大学) (課題番号 22401046) によるものである。

¹調査に協力して下さった Bazo Morfa 氏 (ディメカ出身、ハマル族)、Mulken Gulelat 氏 (トゥルミ出身、アムハラ族)、Shoma Dore 氏 (ディメカ出身、カロ族)、Bodo Kala 氏 (トゥルミ出身、ハマル族) に、この場を借りて感謝を申し上げたい

²/p/ はほとんどの場合 [f] として実現する。また、/k/ については摩擦音化したものを /k/ と下線付きで示す。

母音は長短を区別する。/e/ は非常に狭く、/i/ はしばしば中央化する。/o, u/ は強い円唇性を持つ。名詞アクセントは語彙的であるが、動詞アクセントは予測可能である場合が多い。本稿では特に注意の必要なものを除き、アクセントを表記しない。

2.2 文法

名詞には基本形、a-form、no-form、na-form がある。基本形は接尾辞を持たない形 (e.g. /q'uli/ 「ヤギ」) であるが、a-form は男性・小さいもの・唯一性などを表し (e.g. /q'ulta/ 「牡ヤギ」)、no-form は女性・大きいもの・集合性を表す (e.g. /q'ultono/ 「牝ヤギ」)。また、na-form は複数性を表す³ (e.g. /q'ulla/ 「ヤギ 2、3 頭」)。形容詞も名詞形に一致し a-form、no-form、na-form になる。

動詞には完了語基、未完了語基、形容語基、目的語基がある。完了語基は語根に /-a/ が付いたものであり、完了相・単数命令などを表す。未完了語基は語根に /-e/ が付いたものであり、未完了相・複数命令などを表す。形容語基は語根に /-i/ が付いたものであり、状態を表す形容形 (さらに /da/ 「ある、いる」 と結合して形容動詞) を作る。目的語基は語根に -o が付いたものであり、意志や希望的行為を表す⁴。本稿では、これらの語基にさらに使役接辞 /-s/ や受動接辞 /-ad/ が付けられることが示される。また、これらの語基から、名詞的に働く動名詞や、形容詞的に機能する分詞を作ることができる⁵。

統語論で重要なのは、名詞と名詞の関係もしくは動詞と名詞の関係を表す後接辞や後接語である。例えば、dan はいわゆる直接目的語を示し、na は「～に対し」と行為の向かう先を示す。これらは文と文の関係を表すのにも使われ、しばしば従属文をも作る⁶。

以上を踏まえ、本稿の例文解釈で用いる記号は次の通りである。ハイフンは形態素 (あるいは形態素に含まれる意味成分) 区切り、等号は接語区切り。A = 名詞の a-form、ACC = 目的語標識の /dan/、CAUS = 動詞の使役形、COP = コピュラ、GRD = 動名詞、IMPFV = 動詞の未完了形、IMPV = 動詞の命令形、INTRANS = 動詞の自動詞形、NA = 名詞の na-form、NO = 名詞の no-form、NOT = 否定、PASS = 動詞の受動形、PFV = 動詞の完了形、PL = 複数、PTC = 分詞、PURP = 動詞の意志形、STAT = 動詞の形容形。

³詳しくは Lydall (1976: 406-409)、高橋 (2010, 2012) を参照。なお、Lydall は no-form の異形態として /-(i)n/ を挙げているが、本稿ではこの /-(i)n/ を no-form とは異なる接尾辞と見なす。

⁴詳しくは Lydall (1976: 416-420)、高橋 (2009) を参照。

⁵Lydall (1976: 418) では動名詞と分詞を 'relative(s)' として一括しているが、本稿では別の範疇のものとして扱う。

⁶詳細は Lydall (1976: 410-413, 420-427)、高橋 (2010) を参照。

3 ハマル語の受動と使役に関する表現

3.1 他動詞と自動詞

ハマル語では、自動詞・他動詞の区別は語彙の意味論の範疇であることが多い。しかし、例はさほど多くないものの、形態統語論的な振る舞いの違いも存在する。

形態論的な特徴として、他動詞を自動詞化する標識 /-m/ が確認される⁷。次に挙げる例 (1) は「ドアを開ける」という他動詞文であるのに対し、例 (2) は「ドアが開く」という自動詞文である。

(1) inta kerin **bulidi** ne.
I door open-STAT COP
“I opened the door.”

(2) kerro **bulimi** ne.
door-NO open-INTRANS-STAT COP
“the door is opened.”

同様に、例 (3) は「ボルコト⁸を壊す」という他動詞文、例 (4) は「ボルコトが壊れる」という自動詞文である。

(3) borq'oto inče **ajdi** ne.
chair my break-STAT COP
“(I) broke my chair.”

(4) borq'oto inče **ajmidi** ne.
chair my break-INTRANS-STAT COP
“My chair was broken.”

ここでは3つの点に注目したい。第1に、繰り返しになるが、他動詞文 (1) における /buli/ 「開けた」が、自動詞文 (2) では /bulimi/ 「開いた」のように接辞 /-m/ を持つ形になっていることである。このことは、例 (3) の /aj(di)/ 「壊した」に接辞 /-m/ が挿入されて例 (4) の /ajmi(di)/ 「壊れた」となることから確認される。ただし、接辞 /-m/ による自動詞化は必ずしも生産的ではない。上記例に挙げた /bulimi/、/ajmi/ のように、決まった動詞と結合して語彙化（あるいは化石化）したものが多いように思われる。

注目すべき第2の点は、例 (4) は形容動詞化を示す /-di/ が付いているのに対し、例 (2) は /bulimi/ に形容動詞化を示す /-di/ が付かない。

⁷Lydall (1976: 417) では動詞語幹形成接辞 -m を progressive suffix と呼んでいる。しかし、現時点で Lydall の言う進行相に相当する -m の使用例は確認されていない。

⁸ボルコトは成人に与えられる木製の携帯椅子および枕であり、土台の底は杯にもなる。

- (2') * kerro **bulimidi** ne.
 door-NO open-INTRANS-STAT COP
 “the door is opened.”

この理由を説明するにあたり、次のような形容詞文と形容動詞文との対応関係を考えてみたい。

- (5) inta **q'aji** ne.
 I cold COP
 “I am tired.”

- (6) inta **q'ajidi** ne.
 I cold-STAT COP
 “I am tired (I have been tired).”

形容詞 /q'aji/ を用いている形容詞文 (5) と、形容動詞化した /q'ajidi/ を用いている形容動詞文 (6) はほとんど同義であり、交換可能である。しかし、しばしば、形容詞文が現在の状態を表すために用いられるのに対し、形容動詞文は過去の意味、あるいは過去の結果が現在に影響を及ぼしている現在完了の意味で用いられることが多いように思われる。

以上のことは、例 (2) と (4) における接辞 /-di/ の有無の違いを説明する一助になるだろう。すなわち、例 (2) の /bulimi/ は形容詞化しており、単に現在「開いている」ことを意味する。それに対し、例 (4) の形容動詞 /ajmidi/ は「過去のある時点で壊れ、現在までそのままである」ことを含意している。

注目すべき第 3 の点は、例 (1) の他動詞目的語 /kerin/ が /keri/ 「扉」に接辞 /-n/ が付いた形なのに対し、それが自動詞主語として機能する例 (2) では /kerro/ になることである。/kerin/ の形は自動詞主語には使われない。

- (2'') * **kerin** bulimi ne.
 door-N open-INTRANS-STAT COP
 “the door is opened.”

ただし、接辞 -n を持つ名詞が主語として使えないわけではない。例えば、次の受動文の例では接辞 -n を持つ名詞が統語上の主語として機能している。

- (7) ina **apon** nittadidi ne.
 to_me mouth send-PASS-STAT COP
 “A message was sent to me.”

この現象の理由として、接辞 /-n/ を持つ名詞は「意味上の目的語」に用いられる可能性を挙げておきたい。例 (2') では、/kerin/ は統語上の主語であると

同時に、意味的にも自動詞の主語である。このような主語に接辞 /-n/ を付けることはできない。一方、例 (1) の /kerin/ は統語的にも意味的にも目的語であり、例 (7) の /apon/ は統語上の主語ではあるが意味的には目的語である。このように「意味上の目的語」である主語や目的語には接辞 /-n/ を付けることができる。

3.2 受動表現

動詞の受動形は語基に /-ad/ を付けることで生産的に作られる⁹。次に挙げる例のように、能動文から受動文を作るのは容易である。

- (8) kisi ina=ka apo **nittidi** ne.
 he to.me=with mouth send-STAT COP
 “He sent me a message.”
- (9) ina apon **nitta^afi^adi** ne (kanka).
 to.me mouth send-PASS-STAT COP with.him
 “A message was sent to me (by him).”

能動文から受動文への変形から示唆されるように、ハマル語における受動文は特に明示されずとも行為者の存在を含意し、結果としてある種の強制性を表す。次に挙げる例 (10) では扉が「何者かによって開けられた」ことを意味し、例 (11) はボルコトが「何者かによって壊された」ことを意味する。

- (10) kerin **bulad^afi^adi** ne.
 door-N open-PASS-STAT COP
 “the door is made opened (by someone).”
- (11) borq’oto inče **q’ontad^afi^adi** ne.
 chair my beat-PASS-STAT COP
 “My chair was broken (by someone).”

ここから発展して、受動文は意図せずに生じた現象やそれに伴う被害を表すこともできる。次の例 (12) は「大雨に降られた」という予期せぬ被害を含意している¹⁰。

- (12) inta do:bino **q’anad^afi^adi** ne.
 I rain-NO strike-PASS-STAT COP
 “I was (unexpectedly) struck by the rain.”

⁹Lydall (1976: 417) では /-ad/ とされているが、実際には入破音の /-ad/ である。

¹⁰日本語文法における「被害の受け身」と同じような受動文が、ハマル語でもしばしば現れる。

さて、受動文では行為者が含意され、必ずしも統語的に行為者を示す必要はない。だが、必要に応じて行為者や随行者を明示することもできる。このときに用いられる後接語は、/ka/「～で、～と」、/bar/「～の所に、から」、/kalanka/「～から」など様々である。

(11') borq'oto inče q'ontafidi ne **ikal**.
 chair my beat-PASS-STAT COP by_me
 “My chair was broken by me.”

(13) a. apon ina nittafidi ne **kanka**.
 mouth to_me send-PASS-STAT COP with_him
 “A message was sent to me by him.”

b. apon ina nittafidi ne **kikalanka**.
 from_him
 “A message was sent to me from him.”

c. apon ina nittafidi ne **kibar**.
 at_the_place_of_him
 “A message was sent to me from his place.”

例 (13a) の場合、/apo/「伝言」の起点が「彼」であるのか、使者である「彼」を通して伝言が伝えられたのか、2通りの解釈がある。この点では例 (13b) も同様の曖昧さがあるが、通常は「彼」が伝言の起点と考えられるようである。それに対し、例 (13c) は「彼」の所から伝言が来たことが明確である。

なお、動詞の受動形は形容詞のように状態を表す意味になることが多い。例えば、/burq'ada/「病んだ」、/dagada/「怒った」、/dakada/「汚い」、/wora/「広い」、/q'ajada/「疲れた」、など。これらの中には、/wora/「広くなる、太る」のようにもとは自動詞であったものも含まれている。次の例 (14) は /imba/「父」が怒っている状態を表しており、怒りの原因は主に後接語 /ka/ で示される。

(14) imba **ikal dagafidi** ne.
 father by_me be_angry-STAT COP
 “He is angry with me.”

さらに、/šiq'ada/「切られた」のように形容詞として語彙化した例も見られる¹¹。

(15) inta=q'a det'a ne wa: eq'e **šiq'ada** isanna
 I=for heavy COP meat raw cut to_eat
 “It's difficult for me to eat raw meat cut (i.e. kutfo).”

¹¹中間段階として分詞化の段階があったと思われる。

3.3 行為者の焦点化

第 3.2 節で述べたように、ハマル語の受動文は行為者の存在を暗示しつつ、受益者（もしくは被害者）に焦点を当てる表現と言える。その一方、行為者に焦点を当てるような表現もよく用いられる。

- (16) a. kerin **bulaa** inta ne.
door-N open-PFV-GRD-A I COP
“It’s I (man) who opened the door.”
- b. kerin **bulajno** inta ne.
door-N open-IMPFV-GRD-NO I COP
“It’s I (woman) who opened the door.”

行為者に焦点を当てる場合、上の例のように動名詞による名詞文を作る。例 (16a) は動名詞の a-form であり、この場合は男性を示す。同様に、例 (16b) の動名詞の no-form は女性であることを示している。いずれの場合も、「扉を開けた者は、私だ」のように、「扉が開いている」ことを主題とし、それは「私」がやったことだという新情報につなげている。この構造の文において、動名詞は「行為の対象や結果」を主題として提示し、その「行為者」を焦点として導くものとして機能している。

次の例 (17) も同じく「ボルコトを壊したのは私だ」と行為者に焦点を当てている。動名詞は全ての動詞から派生可能であるため、こうした文は特に制約なく作ることができる。

- (17) borq’oto inče **q’ontaa** inta ne.
chair my break-PFV-GRD-A I COP
“It’s I who broke my chair.”

なお、焦点化とは異なるが、動名詞は形容詞節として名詞を修飾する場合にも用いられることを念頭に置くと良い。

- (18) q’ulta han **šanaa=sa** baza me:m haj ne.
goat-A you buy-PFV-GRD-A=of price how_much do COP
“How much is a goat which you bought?”
- (19) kisi jera jin **se:saa=na** gojti tipa a:pidi ne.
he thing he be_sorry-PFV-GRD-A=to way vertical see-STAT COP
“He found a solution to his problem.”

3.4 使役表現

使役文は、対象者に何らかの行為をさせる表現である。ハマル語で使役文を作る方法について、本節では 2 通りを挙げる。

第 1 に、動詞 /haja/ もしくは /ha:ma/ 「する」を用いて分析的に使役文を実現する方法がある。

(20) inta kodan kina ko ime **hajidi** ne
 I her-ACC to.him she give-IMPV do-STAT COP
 “I made her give (it) to him.”

(21) inta kodan kina ko imbe **hajidi** ne
 I her-ACC to.him she be.given-IMPV do-STAT COP
 “I made her be given to him.”

上の例 (20) を見ると、まず行為をさせる対象者を目的語標識の /dan/ で示し、次に /ko ime/ 「彼女が与える」という文を埋め込んだ後、/hajidi/ 「する・した」を置いている。これが /haja/ を用いた使役文の基本的な語順である。また、例 (21) では行わせる行為を /imba/ 「もらう」という自動詞的（あるいは受動的）な動詞で表しているが、その場合も全く同じ語順で使役文が作られている。

/haja/、/ha:ma/ はしばしば分詞形で置かれ、行わせる行為の方が本動詞であるかのように表現される。次の例 (22) と、使役表現でない (23) とを並べてみる。

(22) kisi wodan kinna ka:mo:no a:nanta=kal wo je?e **ha:majse**.
 he us-ACC his-to meet-PURP-GRD-NO friend-A=with we go-IMPV do-PTC
 “he made us go to his friend.”

(23) wosi kin=na ka:mo:no a:nanta=kal wo je?e.
 we his-to meet-PURP-GRD-NO friend-A=with we go-IMPV
 “we should go to meet his friend.”

使役文を作るもう 1 つの方法は、動詞語基に /-s/ を付けて使役形を作ることである。接辞 /-s/ は生産的であり、ほとんどの動詞で使役形を作ることが可能である。

(24) a. inta kodan kina **imsidi** ne
 I her-ACC to.him give-CAUS-STAT COP
 “I made her give (it) to him.”

b. inta kodan kina ko **imsidi** ne
 I her-ACC to.him she give-CAUS-STAT COP
 “I made her give (it) to him.”

(25) inta kodan kina ko **imfisidi** ne
 I her-ACC to.him she be.given-CAUS-STAT COP
 “I made her be given to him.”

例 (24) には 2 通りの文がある。(24b) のように、行為の指示者としての /inta/ 「私」の他に、実際の行為者 /ko/ を示す場合と、(24a) のように /imsidi/ 「与えさせた」の主語はあくまで「私」であるため実際の行為者 /ko/ を示さない場合である。とは言え、どちらの場合でも実際の行為者は /kofan/ のように目的語標識と共に示されているため、(24b) の /ko/ は冗長である。おそらく、冗長な /ko/ は例 (24) における「埋め込み文 + /haja/」との類推で生じたものであろう。動詞自体は使役形であるにも関わらず、ハマル語の話者は「行為を指示される対象者」と「実際の行為者」という同一の人物を別々に表現する傾向が見られる¹²。

同じことが例 (25) でも生じている。「私は彼女を彼にもらわせた¹³」という意味であるが、この文の動詞 /imbe/ は受動的な「もらう」を使役形にしたものである。ここでも、受益者である「彼女」は /kofan/ のように目的語標識で明示されているにも関わらず、「もらう」主語としての /ko/ も同時に示されている。

このような二重標識は、別の部分でもしばしば現れる。次の例 (26) では、使役文を作る /haja/ へさらに使役接辞 /-s/ を付けた動詞形 /hajsida/ が用いられている。だが、意味が二重の使役になるわけではなく、/haja/ とほぼ同義語として扱われている。

- (26) inta amanta kinčea=na kofan ko imbe hajsidi ne.
 I friend-A his-A=to with_him send-PFV do-CAUS-STAT COP
 “I made her given to his friend.”

4 おわりに

本稿で扱ったハマル語の受動・使役に関する表現について簡単にまとめる。

- 自動詞は接辞 /-m/ で示されることがある。ただし生産的ではなく、語彙化した自動詞が多い。
- 受動表現は、動詞語基に /-ad/ を付けることで表され、受益者もしくは被害者を統語上の主語とする。行為者は明示されなくても含意されることが多い。
- 行為者に焦点を当てる場合、動名詞文を作る。

¹²冗長な行為者主語を示すのは、厳密には非文である可能性もある。しかし、筆者はハマル語の母語話者ではなく内省が不可能であるため、本稿では収集した文をなるべくそのままの形で提供し、分析する方針をとる。

¹³すなわち「妻合わせた」。

- 使役表現は、動詞 /haja/、/ha:ma/、/hajsa/ 「する」を用いて文を作る場合と、動詞語基に /-s/ を付けて表される場合がある。行為を指示された人は目的語標識 dan で示されるが、それに加えて話者はしばしば行為者主語標識も加える傾向がある。

【参照文献】

- Lydall, J. (1976) "Hamar" In M. L. Bender (ed.) *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*. Michigan: Michigan State University. 393-438.
- 高橋洋成 (2006) 「ハマル語の音素とアクセント」 乾秀行 (編) 『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築 (*Cushitic-Omotic Studies 2006*)』 81-91.
- 高橋洋成 (2009) 「ハマル語の基礎語彙、ならびに動詞形態の考察」 乾秀行 (編) 『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築 (*Cushitic-Omotic Studies 2008*)』 107-138.
- 高橋洋成 (2010) 「ハマル語の代名詞と後接語体系」 乾秀行 (編) 『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築 (*Cushitic-Omotic Studies 2009*)』 131-164.
- 高橋洋成 (2011) 「ハマル語の文例集、および文型の分類」 乾秀行 (編) 『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築 (*Cushitic-Omotic Studies 2010*)』 111-137.
- 高橋洋成 (2012) 「ハマル語の数量・程度表現についての覚え書き」 *Studies in Ethiopian Languages*. Vol. 1, 282-291.